

Oral Introductionから始まる 生徒の意欲的な活動を促す英語の授業

埼玉県立深谷第一高等学校 嶋田 容子

はじめに

私は、現任校への異動を機に、授業スタイルを変えて英語で授業を行うことを決意しました。しかし、そもそも「英語で授業」とはどのようなことなのかよくわからず、All Englishでなければならぬという窮屈な考えに縛られていた時期もありました。その結果、私自身が英語でまくしたてるような授業になってしまい、反省したこともあります。また、文法に関しては、説明や知識を整理するには日本語の方がはるかにわかりやすく、効率的な場面も多く、そのような場面での英語による説明は、生徒をさらに混乱させかねないと思われました。このように、英語で授業をするにあたり、授業の中でどのように英語を使用するのか、どのような授業構成にしたらよいのか悩み、試行錯誤の毎日でした。しかし、次第に自分なりの授業スタイルが確立できたように思います。

1 英語で授業を行う3つのポイント

私が、主に日本語で行ってきた授業から英語で行う授業に変えた方法のポイントは、「Classroom English」「Oral Introduction」「Interaction」です。英語で授業を行うことを意識してからは、input中心の授業から、自然とoutputのための活動時間が増えていきました。

まず、私が最初に徹底させたことは、Classroom Englishです。あいさつから英語で始め、指示を出す時や評価を行う時は英語です。これらの表現は、毎回授業で使い続けて習慣化することで、生徒も

すぐに慣れていきます。Classroom Englishに関しては、1年生の4月から徹底させるとよいと思います。2, 3か月経つ頃には、生徒も英語での指示に慣れて動けるようになりました。具体的なOral Introductionについては、以下の「2 Lesson 7におけるOral Introduction」で示します。また、Interactionについては、「3 Oral Introduction後の授業展開」「4 グループ学習について」で示します。

2 Lesson 7におけるOral Introductionの実践例

(1) Oral Introductionのねらいと方法

私は、Oral Introductionを充実させることは、英語による授業の大事な要素だと考えています。私は、各レッスンやセクションごとにプロジェクターを使って行うのですが、毎回構成を考える時には、指導書の「解説と指導編」と「英語で授業編」を参考にしています。さらに、本文に関連する写真や地図を用いて、写真から読み取れるプラスαの情報も話題にしながら、広がりのあるストーリーを展開していきます。スライドを見せながら、一人一人の生徒にQ&A形式で質問を投げかけます。答え方のわからない生徒には、別の表現で言い換える、2択の質問に変える、ジェスチャーを使うなどして、英語で対話ができるように工夫します。また、新出単語を、写真や絵と英語での説明で意味を推測させる活動を行います。この時にも、指導書の「英語で授業編」や英英辞典がたいへん役立ちます。生徒はこのやり取りが

とても好きなようで、熱心に見て聞いて英語を発しています。教師の一方通行にならないように、生徒に英語で質問を投げかけ、重要な単語やフレーズなどは、英語で言わせることで、生徒とのやりとりにリズム感が生まれます。

Lesson 7のOral Introductionで使用したスライドは20枚、今回は、レッスン全体の導入として行ったため、所用時間は25分でした。各セクションの導入として行う時は、長くて10分以内に収まるようにしています。各セクションやレッスンを読む前にこうした活動を取り入れることで、教科書の本文を読む時に英文の内容をイメージしやすくなり、各セクションを学習していく上でのモチベーションアップにもつながります。また、既習レッスンの教材も生かすことができます。そして、Oral Introductionの後には、簡単なワークシートを用意して取り組ませて、内容を整理させます。

(2) 単元の概略

Lesson 7は、オバマ大統領のブラハでの「核兵器なき世界へ」の演説 → ノーベル平和賞受賞 (Section 1) → オバマ氏の生い立ちと大統領になるまでの道程 (Section 2) → 核兵器廃絶の難しさとおバマ氏による現実の一部容認 (Section 3) → オバマ氏のことばに触発された三宅一生氏 (Section 4) という概要です。このレッスンの中には、オバマ大統領、ブラハでの演説、ノーベル賞、オバマ氏の歴史、核兵器、広島・長崎原爆投下、三宅一生氏など、様々なキーワードがあります。生徒の興味・関心を高めるために、このレッスンに入る前にこれらのキーワードを基にOral Introductionを作りました。写真は教科書に載っている写真と、自分で探した画像を使用しました。

(3) オバマ大統領について

まずは、オバマ大統領が聴衆の前で手を振り、ミシェル夫人と一緒に写っている写真のスライドから始めます。“Who is he? What is his famous phrase? Who is the lady next to him? What’s

his job?”など、生徒を指名しながら簡単な質問をしていきます。例えば“She is Obama’s wife.”と答えられない生徒に対しては、“Is she Obama’s daughter, mother or wife?”と質問を変えます。その後“President of what country?”という具合に、さらに質問をテンポよく続けます。そして、この写真で新出単語“audience”を紹介し、絵を指さしながら、“There are many people around them. Who are they? What are they doing?”という問いから“audience”という単語の意味を推測させ、日本語を介さずに紹介します。繰り返し出てくる単語や重要度の高い単語に関しては、このような方法で紹介しています。キーワードが写真の上に浮かび上がるようにスライドを作成し、クラス全体でリピートさせて印象に残るようにしていきます。

“He is the president of America.”という答えが引き出せたところで、次は“America”についてです。Lesson 7だけでなく後に学習するLesson 9においても、アメリカが色々な表記で出てくるので、ここでAmerica = The United States of Americaであることを教えます。“What does state mean?”と質問をしても生徒は答えがわからないので、“There are 47 prefectures in Japan. There are 50 states in America.”とヒントを与えていくと、生徒は“state = 州”であることに気がきます。ここからアメリカの地図を見せて、“Where was he born?”と聞いていきます。“Hawaii”という答えを導き出すために、“It’s an island that is very popular with Japanese tourists. Can you guess where it is?”とヒントを出します。テンポよく進めるために、適宜生徒が理解できる表現に言い換え、ヒントを与えることが大切です。

次に“Barack Hussein Obama”と名前を見せて、“What is his given name?”と聞きます。姓と名に関してはLesson 1で扱っているので、復習にもなる質問です。次に“Barack is a Swahili word. Swahili is an African language.”という情報を与え、次のスライド (オバマの父母の写真) へとつな

げます。

オバマ氏の名がスワヒリ語であるということ、彼の父の写真から、父がケニア出身であることを推測させます。この時も地図を見せながら“The capital of the country is Nairobi. Many marathon runners are from this country. Takahashi Naoko competed with many runners from this country.”と、Lesson 2で学んだ内容もヒントとして使います。そして年表で、オバマ氏の生い立ちと大統領になるまでの道程を、Q&A形式で進めていきます。

(4) 核と平和について

そして、核の話に移ります。オバマ氏が聴衆に囲まれて演説を行っている写真を見せ、まずは最初のスライドで学んだ“audience”の復習です。このように、一度出てきた単語を別のスライドで登場させることも、一つの工夫です。そして、この演説のキーワードとなる“a world without nuclear weapons”という言葉を紹介しますが、nuclear weapon”という単語も、写真と英語での説明で理解させます。“Nuclear weapons have been used only twice in the history in the ending days of World War II.”と説明し、広島・長崎の写真を見せます。この時点で、生徒は今何を話題にしているのかわかるので、“Which country dropped nuclear weapon?” “When were nuclear weapons dropped?”と質問を続けます。そして、広島と長崎に落とされた原爆と、現在、世界にある核兵器の数・威力について想像させます。そしてブラハの演説の写真に戻り、なぜオバマ氏が「核兵器のない世界を実現させるつもりだ」と宣言したのかを考えさせます。

そして最後に、この演説が彼を有名にし、ノーベル平和賞を受賞したことについて触れます。Lesson 6で既習の単語“prize”を使い、“He got the prize after the speech.”と説明し、マラユスフザイ、マザーテレサ、アウンサンスーチー (Lesson 1で登場) など、他のノーベル平和賞受賞

者の写真を何枚か見せて、オバマ氏がノーベル平和賞を受賞したことを紹介します。以上のような流れで、Lesson 7の導入としてOral Introductionを行いました。(Section 4の導入としては別の活動を考えていたので、あえてSection 4の内容には、ここでのOral Introductionでは深く触れませんでした。)

3 Oral Introduction後の授業展開

このように、何を使ってどのようにOral Introductionを展開していくのかを考えて、準備することは時間のかかる作業です。しかし、教科書の題材について調べ学び、生徒にわかるような英語にパラフレーズすることは、教師にとってもたいへん勉強になることですし、私は楽しみながら教材研究を行っています。そして、教師自身が英語を使うことも大切ですが、何よりも大切なことは、生徒に英語を使わせるということです。

そして、Oral Introduction後は、各セクションの指導です。①新出語句・文法の確認、練習 ②本文の概要を掴む練習 (Q&A、T or F、本文内容を図表にまとめさせる、対話を完成させる等) ③Oral Introductionで扱わなかった部分 (内容・言語材料) について日本語での補足説明 ④本文の音読 ⑤リプロダクション ⑥サマリー という流れで進めます。Oral Introductionから得られた情報は、ここでの生徒が自力で教科書の本文を読む活動 (Q&A、T or F、本文内容を図表にまとめさせる、対話を完成させる等) につながります。④では、全体・ペア・個人で多様な音読を行いますが、音読させる前には、十分に聞かせて音声と文字を一致させます。また、① ② ③で英文の内容を理解させた上で行っていきます。そうでないと、ただ読んでいるだけという状態になり、音読の目的が果たせませんし、その後の活動にもつながりません。また、音読指導には様々な方法がありますが、それぞれの音読の目的を知り、適切な順序とタイミングで取り入れるようにしています。そ

して最後には、各セクションのまとめとして、キーワードや写真をヒントにサマリーを言う活動(ペア) → 書く活動(個人)を行います。音読とリプロダクションの活動をしっかり行った後であれば、生徒は本文の内容をまとめて相手に伝えることができます。英語で授業をするには、このような生徒同士のInteractionも大切です。生徒にとって、生徒同士であれば英語を使いやすく、生徒全員が一斉に英語を使い話すことになるので、絶対的な発話量を確保することができます。

4 グループ学習について

そして、前述したSection 4の導入としての活動を紹介したいと思います。このセクションでは、オバマ氏のことばに触発された三宅一先生氏が登場します。その導入として、グループ学習を行いました。彼がニューヨークタイムズに寄稿したエッセイと、教科書本文をアレンジした3つのパッセージ(A・B・C)を作成し、使用しました。Aは三宅氏について、Bは三宅氏の戦時体験、Cは三宅氏の願い という内容の英文です。3人1組になり、A・B・Cのいずれかの英文を読み、英問英答や穴埋め問題に答えながらサマリーを作ります。その後、A・B・C一人ずつを寄せ集めた新たなグループを作り、お互いに得た情報を紹介し合い、共有

します。そして最後に、「三宅氏になったつもりで、オバマ大統領に想いを伝える手紙を書く」という活動を行いました。この活動を行うことで、三宅一先生氏について知り、オバマ大統領の言葉が人々の心を動かす力があつたことを確認し、「核なき世界」実現への道程は決して平坦ではない、と改めて感じる事ができたようです。手紙を書く時には、Section 1～3で読んだ内容や単語・表現を使って、うまくまとめて書くことができていました。サマリーの作成や、このようなグループワークでの活動を行う時は、生徒がうまく言えているか、困っていることはないかを教師がモニターすることが重要です。生徒に英語を使わせっぱなしにするのではなく、フォローするために、全体の前で発表させたり、書いたものを回収して添削したりします。

おわりに

このように、Oral Introductionで生徒の心をつかみ、授業の中で生徒が主体的に英語を使う場面を設定することは、生徒の英語学習に対する関心・意欲が高まり、前向きな学習につながると実感しています。今後も、生徒が積極的に英語を学び、活用する能力を高められるように、指導法の工夫・改善に努めていきたいと思っています。

